

II-2 前交通動脈瘤破裂後の健忘症候群の一例

—外的補助の使用をめぐる—

○三村 将¹⁾ 斎藤 文恵¹⁾ 加藤元一郎¹⁾ 鹿島 晴雄²⁾

前交通動脈瘤破裂の術後に生じた健忘症候群の一例に対して、特に外的補助の使用をめぐる認知リハビリテーションを施行し、一部行動面での改善を見たので報告する。

【症例】

42歳、男性。大卒。妻・子供2人と4人暮らし。大手靴屋の新潟店の店長をしていたが、1995年6月2日、Grade Iのクモ膜下出血を発症。新潟のK病院に緊急入院となった。入院後、MRA施行中に再出血し、意識障害が出現。前交通動脈瘤(ACoA)を認め、6月3日、clippingおよびcisternal drainageを施行した。一時、脳腫脹が出現し、昏睡状態となった。水頭症も出現。7月7日、cranioplastyとVP shuntを施行。以後、急速に状態は改善した。当初、徘徊、作話、重複性記憶錯誤、失見当識が見られたが、1995年12月の退院時にはほぼ消退。以後、重度の健忘が残存していた。退院後は埼玉県上尾市の自宅で療養を開始したが、1996年1月の東京歯科大学市川総合病院精神神経科初診の時点では、重度の失見当のため、日にちの感覚もなく、のんきで病識も不十分であった。自宅では布団上げと風呂の掃除、食器洗いはやるが、他のことは自発的にはしなかった。診察時の取り決めなどについてもメモを取ろうとする姿勢は見られなかった。頭部MRIでは前脳基底部の損傷と右前頭葉の梗塞を認めた。

【神経心理学的検査】

知能はWAIS-RのVIQ 98, PIQ 77。Raven CPMで34/36。前頭葉機能では慶應式WCSTでカテゴリー達成数5, ネルソン型保続5。修正

Stroopでは所要時間A-14秒, C-38秒, 誤答数はA-0, C-8。語の流暢性は語頭音のし3, い4, れ5と不良であった。注意検査では, Audio-Motor Methodでfalse alarm 0, omission 9。3 Cancellationではomission 1。Trail Making Aは良好だが, Trail Making Bは不良だった。記憶では, WMS-Rの各指標はVerbal 62, Visual 67, General 54, Attention/Concentration 98, Delayed scale out。三宅式の有関係3-6-7, 無関係0-1-0。ROCFTのDelayed recall 6.5/36。

以上まとめると、知能は保たれ、WCSTも良好であったが、その他の前頭葉機能課題や注意の転換は不良。著明な遅延後の記憶の低下を認めた。

【訓練方法および結果】

復職前の初期訓練

1996年2月より、おおむね一月ごとに以下のようなスケジュールで行動訓練を実施した。

- 96 2 日課訓練。布団あげ、風呂掃除、昼食、食器洗いの4つの日課について。
→やることとやらないことがはっきり分かれた。
- 96 3 日課訓練。上記についてメモを利用した。
→冷蔵庫にはあってあるメモを見ないことが多かった。
- 96 4 新聞訓練。朝刊をとり、一面トップの見出しとプロ野球の中日の結果(中日ファン)を書き写す。
→新聞はとってくるが、見出しは写すのを忘れる。
- 96 5 電話訓練。11時に病院に電話をかけ、言われた2つの言葉をおぼえる。物語

1) 東京歯科大学精神神経科

2) 慶應義塾大学精神神経科

法・メモ・アラームを用いる練習。

→電話をかけることはだいたいOK。

- 96 6 電話訓練。メモ、ノートを引き出しにしまうようにする。

→2つの言葉の再生は不良。内的精緻化は現実的でない。前向干渉が強い。外的補助をより強力に行うこととした。

- 96 7 電話訓練。4択の再認。カセットテープの自分の声をcueに使う練習。

→カセットをきくのが習慣化されないため、中止とした。

復職前の後期訓練；アラームセット

96年8月以降はアラームのセットを練習することを中心とした。

- 96 8 アラーム訓練。1日2回のアラームセットをして、11時に電話すること、「〇時に△色の鉛筆を箱に入れる」という課題を実施することとした。

→次のアラームセットは促さないとやらない。

- 96 9 アラーム訓練。アラームがなったらメモをみるようにする。

→アラームのセットは3/10程度でできる。

- 96 10 アラーム訓練。「アラームセット」のしおりを入れておく。

→アラームのセットは8/10程度でほぼOKとなった。

- 96 11 アラーム訓練。「〇時に△部コピーをとる」課題。11時に電話をして、クリアファイルにメモしておく。

→アラームがなれば、ほぼ用事は達成できる。

- 96 12 アラーム訓練。コピー、葉書出し、パンを買うという3つの用事課題。

→課題はできるが、翌日のアラームセットが問題。葉書とパンのとき、アラームセットを忘れることが多

い。

復職後の訓練；ワープロの使用

症例は1997年3月に復職し、簡単な事務作業に従事するようになった。しばらくは職場環境に慣れることを優先したが、その後8月からワープロ作業を中心とする外的補助訓練を継続した。

- 1997 8 ワープロで年表の「刊行の言葉」を打つ練習。

→100分から67分へと時間がはやくなった（手続記憶の保持）。

- 1997 9 はじめて一人で通院できるようになった。ワープロで自分で考えて日記を書くか、あるいは既定の文章「ティーカップ」を打つか、いずれかを行う練習。

→「ティーカップ」になることが多い。自分ではあまり考えない。

- 1997 11 日記継続、フロッピーに保存する練習。

→保存を忘れることが多い

- 1998 1 日記、保存をチェックしながら行う。

→保存はだいたい習慣化される。

- 1998 3 アラーム、用事をメモ、実行、チェックを行う複合的な訓練。

→メモをとるようになってきた。おぼえていようとするものがまだ多い。

【考察】

復職の前後にかけて長期にわたり、何かの用事を行う、そのために必要なアラームをセットする、メモをとるといった外的補助の使用を訓練する認知リハビリテーションを実施した。訓練の継続によりある程度外的補助の使用は可能となり、このことが復職にもプラスに働いたと思われる。一方、外的補助の能動的な使用には妻の促しを要し、またメモの使い方も系統的ではなく、十分実用的とは言いがたい状況が続いている。この点は自らの記憶障害への洞察が不十分で、記銘を要する事態が生じたとき、それをメモしなくてもおぼえていられると思う姿勢がなかなか改善できなかったことも関連していると思われる。